

戦争文学として読むチャンネ・リーの『降伏せしもの』
—「飢え」と「降伏」から見えるもの

河原崎 やす子

Reading Change-rae Lee's *The Surrendered* as war literature
—Relation of 'hunger' to 'surrender'

KAWARASAKI, Yasuko

岐阜聖徳学園大学
紀要第54集
2015年2月

戦争文学として読むチャンネ・リーの『降伏せしもの』 —「飢え」と「降伏」から見えるもの

河原崎 やす子

Reading Change-rae Lee's *The Surrendered* as war literature —Relation of 'hunger' to 'surrender'

KAWARASAKI, Yasuko

はじめに

チャンネ・リー (Change-rae Lee)¹ は、アジア系アメリカ文学において現在最も注目されている韓国系アメリカ人1.5世の作家である²。すでに長編小説を5作発表し、そのほとんどが文学賞を受賞するなど高い評価を得る一方、プリンストン大学で文学創作の教鞭をとりメディアにも出演するなど精力的な活動を展開している³。デビュー作『ネイティヴ・スピーカー』*Native Speaker* (1995) と第2作『最後の場所で』*A Gesture Life* (1999) で彼が取り上げたテーマは、コリアン・アメリカンである自分は何者かというアイデンティティの問題である。さらに第3作『空高く』*A Loft* (2006) も大きくとらえると、やはり自分探しと言える。これら3作品はいずれも1人称の語りを用いており、テーマにふさわしい形式となっている。ところが第4作『降伏せしもの』*The Surrendered* (2010)⁴ になって、彼は初めて語りの形式を3人称にした。これはテーマが自分探しではないことと密接につながっている。この作品では、主要人物3名のうちコリアンは1名であとは白人のアメリカ人であり、焦点はトランスナショナルな歴史社会状況に置かれた複雑な人間像にある。これまでの作品と同じく、緻密な構成と探求の物語の要素に加え、謎解きという要素が大きな魅力となって500ページ近い大作の最後まで読み手を引き付ける。定評ある語りの巧みさはこの作品にも十分発揮されており、さまざまな意味できわめて興味深い作品であるが、今のところ本格的な評論はほとんどない。

『降伏せしもの』は戦争をテーマにからめており、そこには日本の関与した戦争も大きな意味を持つ。そもそもアジア系アメリカ文学においてアジアにおける戦争を扱う作品は数多いが、その中で筆者の目下の関心は、日本の関与したアジアにおける戦争がどうアジア系作家に取り上げられているかにある。これまでフィリピンやグアムにおける日本植民統治に関する作品を論考してきたが、今回は朝鮮を舞台とする戦争の文学としてこの作品に目を向けた。朝鮮関連では、当初慰安婦問題を取り上げた『最後の場所で』を取り上げようかと考えたが、すでに多くの論考がされていることに加え⁵、戦争がメインテーマでなく戦争のトラウマを抱えた自分探しの問題が中心テーマとであることを考え合わせ、より戦争の意味合いが重いという点から本作を取り上げることとした。『降伏せしもの』には4つの戦争が出てくる。19世紀半ばの第二次イタリア独立戦争⁶、満州事変以降のいわゆる15年戦争⁷、第2次世界大戦そして朝鮮戦争である。この中で最も大きな歴史背景となっているのは朝鮮戦争だが、いずれの戦争も独自の意味を持ってプロットに深く関わっており、その意味でこの作品は戦争文学と位置づけられる。それぞれの戦争が作品テーマとどう関わるか、そして日本の関わりがその中でどのような位置にあるかを以下に考察してみたい。

※ E-mail kawaraki@ha.shotoku.ac.jp

1. 戦争体験の刻印

『降伏せしもの』はその複雑な構成と内容のために概要を述べるのは困難だが、まずは簡単にまとめてみる。作品には大きくみて二つのストーリーラインがある。一つは、3人の男女が戦争でそれぞれトラウマを負いながら、朝鮮戦争後の混乱期の1953年にソウル近郊ヨンイン（龍仁）の孤児院「新たな希望」New Hope で生活を共にするというものだ。2人はアメリカ人の白人男女、もう1人はコリアン孤児の女の子である。アメリカ人女性は元米兵の男性より年上の人妻で、二人は不倫の関係にあるが、孤児院の火事で女性は死亡、男性は女兒を連れてアメリカに帰り、彼女とごく短期間結婚するが別れる。この話の中心舞台はあくまでも韓国の孤児院である。もう一つのストーリーラインは、30余年の時を経た1986年のアメリカで、かつてのコリアンの女兒は元米兵と決別後に混血の息子を密かに生み育てたが、その息子が行方不明となったため、息子の父親である彼と再会して一緒に息子捜しにイタリアに行くというものだ。女性は末期がんで死を目前にしつつ旅を強行し、息子がすでに死亡しているとわかっても目的地に向かい、そこで波乱の生を終える。こちらの中心はイタリア行となる。この二つのストーリーラインは時間と場所を錯綜しつつ複雑に展開し、さまざまな問題を巧みに織り込むが、戦争体験の刻印という問題からまず考えてみる。

3人の主要人物はいずれも戦争による計り知れぬ傷を負い、苦闘の人生を送る。まず冒頭に描かれるのは、戦争孤児で11歳のコリアンの女の子ジューン・ハン June Han の衝撃的体験である。歴史背景は朝鮮戦争勃発間もない時期に起きた民族同士の争いであり、章タイトルには“Korea, 1950”とある。1950年は53年まで続いた戦争の開始期で、この年韓国は北朝鮮に攻め込まれて6月にソウルが陥落し、国中が混乱に陥っている。ジューンは両親を失って7歳の双子の妹と弟を連れ、大勢の難民と共に南部目指して逃避行中だ。わずか11歳の子が突如として両親と姉を失ったのは2週間前で、まず父が共産党のスパイと疑われて大韓民国国軍（ROK）の将校に暴力的に連行されて公衆の面前で処刑される。これに抵抗した14歳の兄も連行され行方不明となる。母と他の子供たちは逃げる途中に共産軍に遭遇し、姉娘の強姦に抗った母が暴力をふるわれるなど大混乱の最中に米軍の爆撃ですべて爆破され、母や姉の痕跡すら残らない。ジューンはそこを何とか逃げ、妹と弟を連れて南下する列車の屋根の上にかろうじて乗ったというわけだ。だがさらなる悪夢は続き、列車の急停車で妹と弟が屋根から放り出され、妹は即死、弟は瀕死の状態となる。ジューンは再び弟と列車に乗ろうとしてもできず、まだ息のある弟を置き去りにして最後の列車に走り乗る。彼女は“she ran for her life”（31）つまり自分の人生を生きるために走ったのである。この場面は作中でもきわめて重要である。それは作品の最終ステージで47歳の臨終のジューンが、“She was off her feet, alive.”（484）走ってへとへと、でも生きている、と思ひ浮かべる場面と呼応しているからである。11歳の選択はジューンの人生の重大な岐路であり、彼女の人生を決定づけたのである。こうして戦争は、ジューンに家族を失うという喪失体験を刻印したが、その喪失こそは彼女に何が何でも「生きる」というシビアナ選択をさせて、その一生を支配し続ける。ジューンのサバイバルは生涯を貫く姿勢であるが、それが最期の場面の「生きる」イメージにほかならない。

ヘクター・ブレナン Hector Brennan は、朝鮮戦争末期の1953年にジューンがひとりで道端を歩いている時に会った元米軍兵士である。戦争は彼に故国を離れさせ、家族を拒絶し孤独な人生を送らせるが、それは朝鮮戦争ばかりか第二次大戦も関わっている。ヘクターが朝鮮戦争に志願した動機が、第二次大戦を批判する父を見殺しにした事への自責の念という構図なのだ。労働者階級の父は高校生のヘクターに戦争には行くなと常に言うが、毎週末には息子の介抱なしには帰宅できないほど泥酔する。父の真珠湾攻撃の解釈は日本寄りだと軍人などから猛反発を受け、

彼らと酒場で言い合い喧嘩になり、その挙句に息子が父を引き取るというのが毎回のシナリオである。ところがヘクターがこの役目を放棄した晩に父は酔って行方不明となり、後に遺体で発見される。ヘクターは1945年のこの事件以来、父を見殺しにした自分を罰したい、また父が戦争について述べたことが正しかったと証明するために従軍したいと願っている。そこで朝鮮戦争の勃発ですぐ志願し従軍したのだが、戦争は彼にとって過酷な現実を突き付けた。彼は部隊に加わってすぐに捕虜にした少年兵士の拷問に加担できず、その捕虜を殺せという命令も遂行できず、結局少年を自爆死に追い込むという体験をする。このような戦争体験は、彼を深酒と戦争嫌い、そして人間嫌いに追い込む。そのため彼は1953年の休戦協定後に除隊後、韓国に残って孤児院で働くことを選ぶのだ。戦争がなければ、北朝鮮が南を侵略しなければ、自分は夫となり父となり平和でごく平凡な家庭生活を送っていただろう (pp103-4) と想起する彼もまた、戦争体験の刻印に支配された人生を歩んでいる。

もう一人の人物は、ヘクターとジューンが身を寄せた孤児院にアメリカから赴任する牧師エームズ Ames の妻シルヴィー・タナー Sylvie Tanner である。戦争は、彼女の身体と精神に深い傷を負わせている。彼女の場合、戦争は朝鮮戦争ではなく、中国における満州事変後のいわゆる15年戦争である。夫について孤児院に来たシルヴィーは、頑な態度と性格のジューンをかわいがり、その他の孤児たちへも愛情深く接するが、時に謎めいた行動や陰影のある感情を見せる。その理由は「満州、旧正月、1934年」と銘打たれた第7章で明かされる。13歳のシルヴィーは宣教師の家庭に生まれ、世界各地を渡り歩き中国の満州で暮らしている。1934年とは、1932年に帝国日本によって満洲国が設立された後に満洲各地で抗日勢力が共産党組織を復活させ始めていた時期である⁸。1934年の旧正月にシルヴィーの両親たちが会食しているところへ突然日本兵が乱入してきて、共産党の抵抗運動員を明かすよう一人ずつ尋問するが、標的はシルヴィーが密かに愛情を抱いていた中国人で家庭教師のベンジャミン・リー Benjamin Li であった⁹。彼は拷問されても同志の名を明かさないために、日本軍兵士は彼の前で次々に残虐な行為を展開して自白させようとする。彼らは宣教師仲間を殺し、母の強姦を遮ろうとする父を刺殺、母も犯した挙句に撃ち殺す。それでもなお黙秘するリーの前で命を受けた日本兵がシルヴィーをも犯そうとした時、ついにリーは仲間の名前すべてを叫び明かす。こうして生き残ったのはシルヴィーのみとなるこの惨事は、彼女に計り知れぬほど深く大きい衝撃を与える。彼女は帰国後に宣教師を目指すエームズと出会って結婚しても、決して自らの体験を夫に語らない。語れないのだ。結局、戦争は突発的暴力的にシルヴィーを孤児にしてその体と心に癒されぬ傷を刻印し、彼女の生きる気力を衰退させていくのである。この喪失体験はジューンや孤児たちにも多かれ少なかれ共通しているため、シルヴィーは彼らから本能的に慕われる。

戦争体験の刻印はこのようにたどれるが、戦争に関してもう一つ顕著なのは、これらの戦争がいわば並列に置かれていることである。作者の視点は一つの戦争にあるのではない。シルヴィーの体験における日本軍の残虐さは、ジューンの体験におけるコリアン同志の内乱の残虐さといわば同列に描かれている。ヘクターには、朝鮮戦争と第二次大戦が並列に投影されている。ひとつの戦争を問題にするというよりも、戦争のもたらした複層的な影響を問題にしていることが明らかだ。いわれなき暴力や強姦はどの戦争でも起こり、民族同志の争いでも起こることが示される。さらに、いわば全編のまとめ役として出てくるソルフェリーノの戦いを描いた本 *A Memoire of Solferino*¹⁰ は、このことをより明瞭にする役割を果たしている。後に詳述するが、これはシルヴィーが両親から与えられた戦争の記録であり、シルヴィーからジューンへ、ジューンからその息子ニコラスへと渡され、

最終的にそれを追ってジューンとヘクターは戦いの地であるソルフェリーノまで赴くという流れは、戦争という暴力の連鎖イメージを示すものに他ならない。

2. 「飢え」と「降伏」の関係

『降伏せしもの』には、「飢え」「渴き」に関する記述がきわめて多い。それは前項で指摘した戦争体験の刻印を示すものにほかならず、その現実的な言葉にはいずれも象徴的な意味が付与されている。「飢え」も「渴き」も、「食」に関する言葉である。食に関して、アジア系アメリカ文学研究者の Wenying Xu は、食と主体の関係がアジア系アメリカ文学で重要な問題を示すものであるのに、そこに注目する者はごくわずかしかないと指摘している。そして、食とは栄養だけでなく意味を持つとする Claude Fischler や、食とは単なる食べ物ではなく限りなく解釈可能な実体化した感情なのだという Terry Eagleton の主張を理論的根拠として、独自の作品分析を展開した¹¹。つまり食に関する記述はその中に多様な意味を込めてあり、これを分析するのはとりもおさず作品の全体像に迫ることになる¹²。『降伏せしもの』では主要人物全員が「飢え」ており、その「飢え」「渴き」がいかにタイトルの「降伏」に関わるかをここで明らかにしたい。なお「飢え」と「渴き」はほぼ同義に使われていると解釈する。

双子を連れだした11歳の難民孤児ジューンは、逃避行する間中限りなく「飢え」続ける。彼女の周りの難民たちは、いずれも“all chronically weary and hungry” (7、下線部筆者、以下同) で “nothing on hand to eat” (9) という状態だ。その難民たちが農家に押し寄せ、食料を見つけ暴力的に奪取するのに加わるジューンもまた、“She felt hollowed with hunger and weariness”(10) という状態なのだ。こうした「飢え」が彼女に誓わせるのは、決して飢えることのない人生である。

Hadn't she made that very pact a hundred times, a thousand times, when she was marching on the dismal road? Let me eat until I can't, let me fill this infinite cave, and I'll die right here. I'll surrender. (58)

路上を逃避した時に彼女が何千回も誓ったのは、食べられなくなるまで食べることができたらもう死んでもいい、ということだ。「飢え」は征服できない底なし穴だが、征服できるなら「降伏」しよう、という上記の文で、タイトル用語「降伏」が「飢え」と関連して初めて出てくることに注目したい。ジューンは飢えることを断固拒絶し飢えないならば降伏すると誓うわけだが、「降伏」とはこの場合敵対者がいるわけではないので、何にでも従うという意味になる。ジューンは誰かに従うとか言うことを聞くなどしない頑固な性格なのに「従う」、というこの誓いが示すのは、「飢え」がもたらした彼女の価値観なのである。これは彼女が「降伏せしもの」となる条件と可能性を示しており、当然彼女はこの時点では降伏していない。

ジューンの「飢え」が物理的に解消するのは、戦争の終わりごろに元アメリカ兵のヘクターに出会ってからである。その時彼女はほとんど何も口にせず3日間歩き続けており、“a starving girl” (115) で “so thirsty” (4779) 「飢え」と「渴き」に襲われている状態だった。そこでまず「渴き」を癒そうと泥を口にされたため腹痛や嘔吐に見舞われるが、それでも何とか水分補給ができたため生き延び、結果的にヘクターに出会う。ヘクターは警戒するジューンにチューインガムを与えるが、ジューンはそれがあまりにおいしくて飲み込んでしまい、もう一度吐き出し、地面に落ちて泥がついたそのガムを拾ってまた食べる。それは、“To this day, I think that was the most wonderful thing I've ever tasted.” (477) 単なるガムという食べ物を超え、永遠に記憶にとどまるものと化す。この行為は、何が何でも飢えに決別するというジューンの執念を示すものだ。こうしてジューンのあくなき執念は、

彼女のサバイバルを呼んだというわけである。

ところが、ジューンは1986年時点でアメリカにおり、胃がんで死の宣告を受けている。

It was almost laughably ironic, that the cancer should be in her stomach. That she would die with her belly full. And thus here she was, never to feel anything like hunger again. (58)

腹一杯にしてから死ぬと誓って「飢え」を脱出し、アメリカで豊かに暮らしている彼女が、飢えを感じることをできない末期の胃がんなのは、考えられないほどの皮肉なことだというわけだ。だが次の記述は、死に近づいているジューンには新たな展開があることを明らかにする。

The hunger. It had come for June again. ... She knew that hunger would clarify her mind, strip away all extraneous thought, and leave her with the focus of pure, unswerving will. (433)

死に臨んでいる今、「飢え」はジューンにゆるぎない意思を持たせるものとなり、肯定的な意味を持ち始めるのだ。かつて孤児院にいた時、もはや物理的に飢えることはなくとも、精神的な「飢え」は彼女に絶えず付きまとっていた。決して笑わず、他の孤児と打ち解けず、彼らの大切にしているものを盗むなどのジューンの行為や、シルヴィーの愛情を異常に求めることなど、すべて「飢え」によるものなのである。シルヴィーとヘクターの性行為を覗き見するのも、ジューンの「飢え」から発し、さらなる「飢え」を喚起した事である。この「飢え」を癒すのは無償の愛しかなく、ジューンはそれをシルヴィーに求める。しかし究極の癒しと希望していたシルヴィー夫妻の養子になる望みがかなわないと知った時、彼女は絶望して孤児院のチャペルで火事を起こし、結果的にシルヴィーを焼死させてしまったのである。ところが先の文に示されたように、このような「飢え」とはまったく異質の「飢え」が、瀕死のジューンに行方不明の息子を捜させ、息子の父ヘクターを見つけて二人でイタリアのソルフェリーノまで行くエネルギーをもたらすのだ。

ここで明らかになるのは、「飢え」には二通りあるということだ。ジューンの前半生につきまとう「飢え」は、あくまでも否定的な意味を持ち、彼女から様々なものを奪う。薬物の常用はこれを象徴しており、短くて幸せな弁護士との結婚生活の期間を除いて彼女は薬物を手放せない。「飢え」が付きまとっているからだ。だが死に際して彼女が新たに直面する「飢え」は、もはや奪うものではなく与えるものとなり、希求を可能とするのである。それゆえ先に指摘したように、ジューンが死を迎えるシーンは、終末的ではなく希望的な生に向かって走るイメージとなる。そして彼女は、肉体に精神は負けることはない、として“One need not surrender.” (370) と自らに言い聞かせるのである。降伏などする必要などない、というわけだ。こうして彼女が「降伏」しない人間であることが明らかにされる。

これに対しシルヴィーの「飢え」は精神的なものに限られており、実際に飢えることはない。しかし彼女が精神的に飢える事件の始まりが、食べる行為である旧正月の宴会から始まるのは象徴的である。親しい者たちとの会食を断ち切られた暴力行為とその後の残酷な殺戮は、シルヴィーに永遠の「飢え」を刻印する。しかしその「飢え」は食を求めるものではなく、逆に食を厭わせたヘンを常習させる。孤児院で宣教師の夫の片腕として働くシルヴィーが感じる虚しさ“the growing rime of hollowness” (220) は日々大きく心を占めるようになり、「飢え」は“no longer had an understanding of hunger, a full of barley rice as significant to her as if it were mounded with pebbles.” (220) もはや食のレベルを越えてしまったわけである。かつて満洲にいた時、シルヴィーは家庭教師のリーと肉体的な接触を持っており、そのリーが彼女の両親とともに目前で拷問され殺

害されてから、彼女の性的な「飢え」が始まった。性の目覚めが不条理な暴力に断ち切られたことで、底なしの飢餓感を生じさせたわけである。アメリカに帰国後、彼女が大学時代に40代の男と不毛な関係を結ぶのも、結婚後に夫との関係が充足しないのも、その「飢え」によるのである。夫との初めての交わりはシルヴィーに過去の事件を思い出させ、5回に及ぶ流産は夫婦関係が不毛であることを暗示する。こうして性的な「飢え」から逃れられないシルヴィーだからこそ、ヘクターと関係を持つのである。

彼女のヘクターとの関係は、渴きから始まる。夫が不在の晩に彼女が置き忘れた本を持ってヘクターが現れた時、食が細くなって弱っていたシルヴィーはヘクターに、“I'm so terribly thirsty. Would you get me some water, too?” (149) と頼む。ここで彼女が求めているのは、水というよりは手を差し伸べてくれる人間である。そしてこの時、ヘクターが目にする彼女の踵の傷は心の傷に他ならず、同じような傷を持つヘクターは即座にその意味を理解し、彼女に引き付けられる。こうして出会って間もない二人は肉体関係を持つが、そこにはシルヴィーの性への「飢え」が介在する。

.....she had spent the previous four nights in Hector's bed, neither of them sleeping at all, he drinking and she drugging herself in alternation with their lovemaking, which for Hector was a revelation, this woman whose sexual hunger was both a plea and a hazard ... (322)

二人が性交渉にそれぞれ酒と薬物を必要とするのは、両者ともに抱えている「飢え」が深刻で充足できないものだからである。しかもこの時彼女が彼と性関係に至ったのは、“the grave force of both will and surrender” (323) 身をゆだねて従うとする意思の力によるのである。こうしてシルヴィーが「降伏せしもの」だということが明らかとなる。彼女の「飢え」は主体的な生/性を消去し、彼女を「降伏」へと向かわせ、陰の様な消極的な存在へと追いやる。そして彼女が「降伏せしもの」だからこそ、ジューンとヘクターは自らに欠落した母親、愛人、子供という存在を補うものとして、彼女を愛し必要とするのである。「飢え」と「降伏」はシルヴィーにとって切り離せないものであり、戦争体験の刻印そのものなのである。

それではヘクターの「飢え」とはどのようなものなのか。じつはこの作品中、もっとも不明瞭なのがヘクターという人物である。女性二人の人格形成が丁寧に描かれているのに対し、彼の経緯は今一つ明らかでない。なぜジューンと短期間結婚したのか、なぜ別れたのかなどはっきりしないことは多い¹³。ただ、彼の異常なほどの飲酒癖と女性遍歴は、「飢え」から来るとしか解釈できない。しかもそれは先にも指摘したが戦争体験が刻印したものにほかならない。戦後帰る家族も場所もない彼が韓国に留まり孤児院で働くのも、この「飢え」によるのだが、それを解消することはできない。ただ彼が孤児院でタナー夫妻に初めて会ったころ、キリスト教の孤児院というこの環境で自分はキリスト信者になるかもしれない、そして自分に異なる局面が展開するのではないかと予想する。ただその条件は、“he was becoming a willing subject himself, someone who had indeed begun ceding his life, too, if arranging a very different surrender.” (128) 普通でない降伏があれば、ということになる。はたして彼は「降伏」するのだろうか。

ヘクターは息子ニコラスの存在を初めて知らされ、ジューンに請われてニコラス捜しにイタリアに渡る。行先はソルフェリーノ、かつてシルヴィーが両親から受け継ぎ終生大事にしていたが最後にジューンに与え、ジューンが息子に渡した *A Memory of Solferino* の舞台だ。ここに息子がいると信じるジューンは道中急速に体調を崩し、ヘクターはかつてのようにジューンの保護と介護をする羽目に至る。この時はじめて、ヘクターは自責の念にとらわれ、“He wanted his own sentence ...

for every instance when he had failed...Failure grand and total.” (468) それまで多くの人間を不幸にしてきたことを壮大なる失敗と考える。ジューンに憎しみを感じてその感情を押し殺してきたが、それも失敗だったかもしれないと思う。そういう彼にジューンは過去の事実を語る。体は弱っているのに、降伏を拒絶し過去を直視して力をふりしぼっての行為だ。その話からヘクターはジューンが孤児院のチャペルに放火したと初めて知るが、それも彼女への憎しみには至らない。火事の晩、チャペルに飛び込んでジューンを救出しようとしたが強い火勢になすすべもなかった所から、ヘクターを引っ張り出して生かしたのがほかならぬジューンだったからである。

ヘクターは、この世ではだれもが救われるが、問題はその救いが “...frailty, infirmity. It expired too soon.” (479) 脆弱ですぐに失われてしまうことだと考える。彼の大切に思っていた人間はみなそうやって消え失せた。シルヴィーとの関係もそうだ。彼はシルヴィーが “...you're like me. You're frail and selfish, but you're reckless, too.” (472) もろくて利己的だけれども向う見ずという、自分と共通したものを持つがゆえに彼女を愛したのだが、若かったヘクターは彼女の性的な「飢え」を自分への愛と誤読した。彼女は “offering herself to his pure and towering and, surrendering to his great keen need” (470) と彼の要求に従って身をゆだねただけだったのである。このようにヘクターのジューンとシルヴィーとの関わりを見てくると、彼もまた「降伏せしもの」ではないかと思われる。傍観者のようになすすべもなく運命に翻弄され、抵抗するとか希望を持つことなく運命に身をゆだねているからだ。彼の性と飲酒への過大な欲望はまさに「飢え」そのものであり、それは彼の場合も「降伏」へとつながっているのである。

3. ソルフェリーノの意味

こうして戦争体験は3人にレベルの異なる「飢え」を刻印し、それがそれぞれの形の「降伏」につながる。シルヴィーは「降伏せしもの」であり、ジューンは「降伏せしもの」となる可能性を持ちながらも最後までそれを拒むもの、そしてヘクターはあいまいながらも「降伏せしもの」に連なるものと考えられる。この3人をつなぐいわば絆となるのが、時空の共有としての孤児院と、時空を超越したものとしてのソルフェリーノの本である。後者の存在がどのような意味をもつのか、ソルフェリーノとは何かをここで考えてみたい。

『ソルフェリーノの思い出』が初めて作品に登場するのは、ヘクターが孤児院でシルヴィーに出会って間もない時で、彼女が置き忘れたこの本を彼が見つかる場面である。作者アンリ・デュナンは旅行者として出会った戦いを詳細に描写しており、ヘクターはその戦闘記述が自分の体験に極似していることに驚愕し、ウイスキーの力を借りないと読み終えられないほどの衝撃を受ける。それと同時に、この本はヘクターに持ち主のシルヴィーへの興味をかき立て、既述したように本を返しに行ってから二人の関係が始まる。それ以降もこの本はストーリーの鍵となる場面を作っていく。シルヴィーの侍女の様な存在となるジューンは、これが他の本のように読んだり触れたり出来ないシルヴィーの秘蔵品だとわかって、彼女を困らせるために盗む。シルヴィーはこのジューンの行為を許すが、それでも一緒に読むことはしない。彼女にとっては特別な存在の本なのだ。それは “To our steadfast daughter.” (258) という手書きの書き込みが示すように、両親からのかけがえのない遺品であり戦争で断ち切られた愛情の証だからなのである。シルヴィーがこの本を読むのは、戦争の刻印を少しでも癒すためなのだ。

その大切な本をシルヴィーがジューンに与えるのは、夫がアメリカへの帰国と誰も養子としないと決めた時である。シルヴィーはジューンに別れを告げて本を与えるが、ジューンは “And so this is

what she would have. This was her prize.” (450) これは自分が盗んで返したことへの褒美なのだとして理解し、全く嬉しくもない。愛しているならアメリカへ自分を同行するだろうに、という思いは絶望感となってチャペルでの放火に至る。ジューンは火の中にこの本も他の物と一緒に投げ入れ、すぐにそれが過ちだと気づいて取り出す、手には火傷を負い本は表紙が焼け焦げる。そしてシルヴィーの死後、ジューンもまたこの焦げた本を終始大切に持ち歩くが、息子のニコラスが家を出る時に献辞を書き添えて渡す。最終的にはその本はジューンの手に戻り、最期の旅に同行する。こうして1冊の本は登場する人物の手から手へと渡され、各自の物語を紡ぎ合わせる役目を果たす。その行為は、戦争の連鎖を暗示してもいると解釈できるのである。

それではこの本の舞台であるソルフェリーノという場所はどうかテーマに関わるのだろうか。作中にソルフェリーノへの旅は2度出てくる。初めはシルヴィーが両親とともに訪れる旅、次がそれから数十年後のジューンとヘクターの息子捜しの旅である。前者は赤十字の創立者とその聖地へのいわば巡礼として、シルヴィーが両親と戦後75周年記念式典へ参加するために行くものだ。後者はすでに見たとおり、ジューンの強い意思でその地に引き付けられて行くものである。シルヴィーも、最期を迎えているジューンと同行するヘクターも、ソルフェリーノの名高い納骨堂に足を踏み入れ、その異様な雰囲気にもまれる。そこには千以上の骸骨が鎮魂の意図のもとにずらりと並べられており、まるで“Look at us… We were never divine.” (195) われらを見よ、われらは神ではないと一斉に言っているように感じられる。13歳のシルヴィーにこう感じさせた同じ光景が、60年以上を経てジューンとヘクターの前にあるのだ。これが最終シーンである。ヘクターに抱えられて納骨堂の中へ入ったジューンはもう目が見えず、並んでいる骸骨を“*It must be beautiful. Is it beautiful?*” (483) 美しいのでしょうかね、とヘクターに尋ね、ヘクターは“*It is beautiful. … This is our place.*” 美しい、これこそ我々の場だと答える。彼らの最終地点が骸骨を安置してある納骨堂、というのには大きな意味が見出せる。戦争の傷はついに彼らをここに連れて来、100年以上前の死者の列に加えることで、その傷を最終的に癒すのだと考えられるからだ。彼らの飢えも、それにまつわる様々な苦しみも、ここに連なることで初めてその場を見出すというわけだ。ソルフェリーノの戦いが古い戦闘として他の戦争を束ねる役目を果たすのは、それが戦争の原点を示すからである。戦いとはいつの時も悲惨で数知れぬ人間を死に追い込み、その刻印は人間を終生支配する。この戦地への巡礼は、こうした戦争の連鎖を手繰りながら、戦争で受けた傷を癒すことにつながるのである。

おわりに

ここまで、いかに戦争が3人の主要人物の人生と有機的に関わったかを解明してきたが、今一度冒頭に述べた日本の関わる戦争ということに立ち戻ってみる。なぜ日本の15年戦争がこの作品に取り上げられているか、なぜシルヴィーのトラウマと関わらなければならなかったかということである。作者のチャンネ・リーは、歴史を真実として書くのは不可能だが、あまり知られていない歴史や個人史を小説から読者が知ることに意義があると述べている¹⁴。ゆえに彼が目を向けるのは、ソルフェリーノや満洲史における知られていない部分である。朝鮮戦争に関しても、内戦時の混乱や孤児院などを取り上げており、戦争そのものではなくその周縁に関心が向けられている。日本関連の歴史もまた、埋もれた歴史の部分である。満州建国後に日本軍が行った軍事行動の中には、このような外国人宣教師に関する蛮行があったかもしれないが、日本でもあまり知られていない。それがあくまでも外国人が標的だったのではなく、共産党員刈りという大義名分のもとの行為だったとしても、残虐さは変わらない。何よりも重要なのは、これがシルヴィーに与えた傷とのつながりである。

シルヴィーが「降伏せしもの」となるのは、その傷がどれだけ大きく深いかを示している。彼女にはジューンのように、降伏をはねのけるエネルギーは残されていない。明らかに日本軍の行動の残虐さが、同じような惨禍をくぐった二人のこの違いを生んだということだ。ジューンやヘクターが傷を負った朝鮮戦争よりも、シルヴィーを「降伏」に追いやった日本軍の行為のほうが、より罪深くより残虐なものだったと読み取れるのである。

この作品は戦争小説として戦争に翻弄される人生を送った3人の人物を描き出すが、その戦争の描き方は並列のように見えてじつは微妙に描き分けをしている。ソルフェリーノの戦いで連鎖を示しつつそのすべてを包括するという枠組みを用いたのは、それを紛らわす手段とも考えられる。だがわれわれ日本人読者は、日本の植民地主義の蛮行に対するより強い非難の声をかすかに聞き取ることができるのである。

※本研究は JSPS 科研費（基盤研究（C）24520323）の助成を受けたものである。

【註】

¹ 名前の発音は、チャン（グ・レ）、（ ）の中は弱く短く発音するために、チャンネのように聞こえるがまったくグ・レを抜いているのではない。日本での翻訳時にこの表記となっているためこれを用いる。

² 彼は両親に連れられて米国に移民した時3歳であり、このように幼児期に移民した世代を1.5世という。

³ 第1作がペンフォークナー賞、第2作がアジア系アメリカ文学賞（Asian American Literary Award）、第3作は Asian/Pacific American Award for Literature、第4作がピューリツァ賞最終候補および Dayton Literary Peace Prize 受賞。また YouTube では彼自身がインタビューに答えている姿や作品一部を朗読する姿などを視聴できる。

⁴ *The Surrendered* は翻訳されておらず、ここでは村山論文での翻訳タイトルが適切と考え使用する

⁵ 日本においても小林富久子、ゲイル・サトウなど数多くの批評がある。

⁶ 1859年6月24日、フランス・イタリア連合軍とオーストリア帝国軍の戦闘。4万ともいわれる大勢の戦死者が出た激戦であった。

⁷ 1931年の満州事変から1945年の第二次世界大戦終結まで日本が中国大陸で起こした戦争をさすが、現在正確な定義がないために学校教育では教えられない。

⁸ 小林英夫、p.118

⁹ 満洲国においては、反満抗日のスパイの摘発、密告を軍隊や警察が奨励し、軍や警察は「臨陣格殺」つまり状況に応じて満洲国に敵対すると判断したら即座に殺害できるという機能を持っていた。（山室、pp294-295）

¹⁰ これは実在の本で、Henri Dunant が1862年に著した。赤十字創始者のデュナンは、ナポレオン3世に会うために訪れたソルフェリーノでフランス・イタリア連合軍とオーストリア帝国軍の間で展開された激戦を目撃し、多くの負傷兵の手当てに加わった。その凄惨な光景を本にまとめ、それが赤十字の創設に至った。邦訳はアンリ・デュナン『赤十字の誕生—ソルフェリーノの思い出』日赤会館、1959年（初版）。

¹¹ Wenying Xu, “Introduction”, pp2-3.

¹² 筆者はすでに、1994年の論文でフィリピン系アメリカ作家の Jessica Hagedorn 分析をする際に、「「食べる」と「飢える」ことの意味」というタイトルのもとにこの方法を取っており、これがアジア系ポストコロニアル文学に有効な分析視点だと考えてきた。「Jessica Hagedorn の *Dog eaters* を読む—「食べる」と「飢える」ことの意味」*AALA Journal* No.1, 1994. 68-74.

¹³ Michiko Kakutani は *New York Times* の書評で、June と息子の関係や Hector との別れがはっきりせず、Hector は人間というよりもシンボルのように描かれているという欠陥にもかかわらず、この作品は高く評価できるとしている。

¹⁴ Young-Oak Lee によるインタビューより。

【参考文献】

- Choi, Chungmoo, "The Politics of War Memories toward Healing." T. Fujitani et.al., eds., *Perilous Memories—The Asia-Pacific War (s)*. Durham & London: Duke University Press, 2001. pp.395-409
- Chu, Kandice, *imagine otherwise—on Asian American critique*. Durham & London, Duke University Press, 2003.
- , "Discomforting Knowledge, or, Korean "Comfort Women" and Asian American Critical Practice" *Journal of Asian American Studies*, Vol6, No.1, 2003.
- Kakutani, Michiko, "Lives Scarred by Horrors of Korean War" *The New York Times*, March 9, 2010.
- Lee, Chang-Rae, *Native Speaker*. New York: Riverhead 1995.
- , *A Gesture Life*. New York: Riverhead, 1999.
- , *The Surrendered*. New York: Riverhead, 2010
- Lee, Young-Oak. "Language and Identity: An Interview with Chang-rae Lee." *Amerasia Journal*, Vol.30 No.1, 2004. pp.215-227.
- Rafferty, Terrence, "Death Pursues Her" *The New York Times Sunday Book Review*, March 12, 2010.
- Shigematsu, Setsu & Camacho, Keith L., eds., *Militarized Currents—Toward a Decolonized Future in Asia and the Pacific*. University of Minnesota Press, 2010.
- Wood, James, "Keeping It Real—Conflict, convention and Chang-rae Lee's *The Surrendered*." *New Yorker*, March 15, 2010.
- Xu, Wenying, *Eating Identities—Reading Food in Asian American Literature*. University of Hawaii P., 2008.
- 河原崎やす子「フィリピン系文学にみる日本の植民統治」小林富久子監修『憑依する過去—アジア系アメリカ文学におけるトラウマ・記憶・再生』、金星堂、2014年、44-61頁。
- 小林英夫『＜満洲＞の歴史』講談社現代新書、2008年。
- 小林富久子「トラウマ文学としてのコリア系「慰安婦小説」—『コンフォート・ウーマン』『最後の場所で』」『憑依する過去—アジア系アメリカ文学におけるトラウマ・記憶・再生』、95-113頁。
- サトウ、ゲイルほか『アジア周縁から見たアメリカ 1850~1950』彩流社、2010年。
- 村山瑞穂「アイデンティティと階級の相克を越えて—チャンネ・リーの『ネイティヴ・スピーカー』はネオリベラル小説か」吉田廸子ほか『ターミナル・ビギニング—アメリカの物語と言葉の力』論創社、2014年、172 - 190頁。
- 山岸信一『キメラ—満洲国の肖像 増補版』中公新書、2004年。